

きらりとてくまく

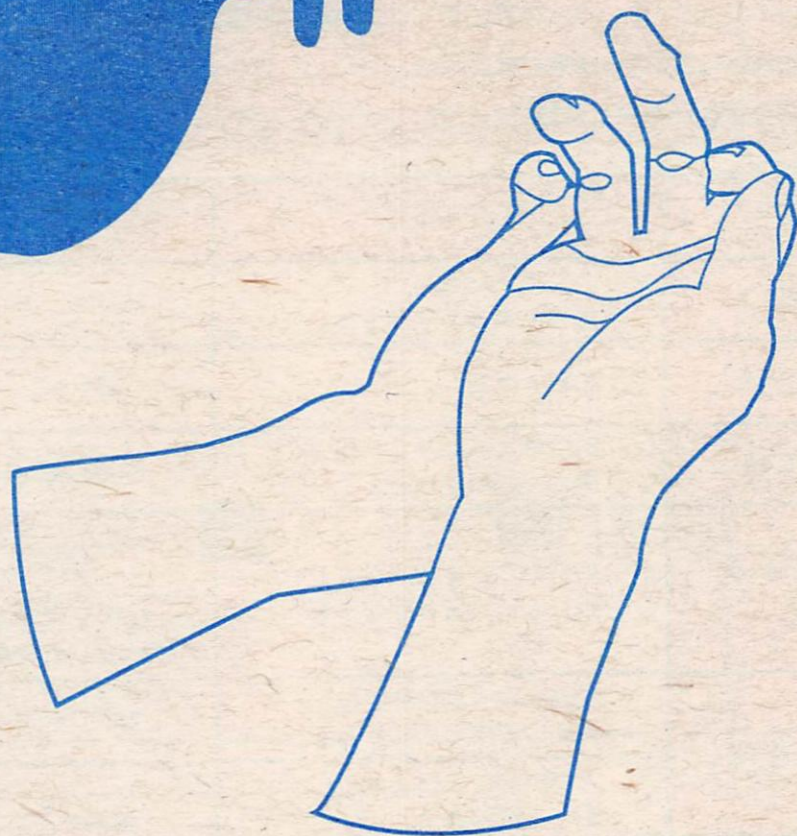
第5号



特集

「オープン・クローズ」

について



オープン・クローズとは？

『きらりとてくてく』第5号のテーマは「オープン・クローズ」についてです。

就職にあたって、ご自身の病気や障害のことを伝えて働くこと、および就職活動をするを「オープン」、伝えなくて働くことを「クローズ」と言います。障害を会社に伝える義務はありません。つまり、オープンにするのか、クローズにするのかは自分で決めることが可能です。

現在当事業所を利用されている皆さんにオープンのイメージを聞くと、

「上司や同僚から偏見の目で見られるのではないだろうか」

「腫れ物に触るように関わられるのではないだろうか」

「一人前に扱ってもらえなくなるのではないだろうか」

との声が多く見られました。

実際にオープンで就労経験のない方にとっては、オープンにせよクローズにせよ、イメージの中での不安や悩みが大きくなると思われます。



オープンで働いてみて分かったこと

そこで、こうしたイメージの中の不安や悩みは実際にはどうなのかを調べるために、現在オープンで就労されている障害のある方に、オープンとクローズについてアンケートを行い、それぞれの良いところ、悪いところ、働く前のオープンのイメージと実際にオープンで働いた感想を聞いてみました。回答内容をまとめてみたところ、以下のような項目に分類できました。

(アンケート対象：当事業所を利用し就職された方 回答数：24名)

項目	オープン	クローズ
求人数	× 一般求人に比べ、障害者求人の数が少ない。	○ 就職先、求人職種が多い。
障害者求人	○ 応募できる。	× 応募できない。
通院・服薬	○ 通院時休みやすく、周りに隠さず服薬できる。	× 通院、服薬共にしづらい。
病気に対する理解	○ 病気のことを隠さなくても良いという安心感がある。	○ 特別な目で見られていないという安心感がある。 × 症状を理解されず、出来ないことを同僚に責められた。
仕事上の配慮	○ 業務内容や勤務時間など、体調に配慮してもらえる。 × 人間関係に「壁」を感じる時がある。	○ 自尊心が保てる。 × しんどくても職場では相談できない。

項目	オープン	クローズ
職場での支援者のサポート	○ 支援者の力を借りて、問題を解決できる。	× 職場で支援を受けられない。
キャリア形成	○ 環境の変化が少なく仕事に打ち込める。	○ 昇給、昇格のチャンスがある。
	× 仕事の幅を広げたいと思っても、仕事を任せてもらえないことが多い。	× 仕事量や責任が増えることでストレスがかかる。

こうして比較してみると、オープンとクローズにはそれぞれにメリット、デメリットがあるということが分かります。

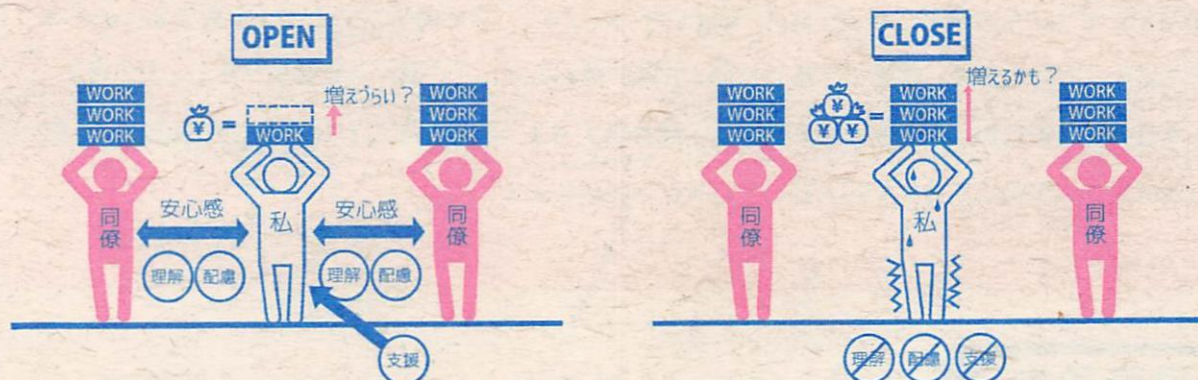
そしてイメージと実態に関しては、オープンで就労した方もその大半が動く前には「偏見や差別を受けるのでは」というイメージを持っていた、との回答でした。

実際にオープンで働いてみてからの感想として、「責任のある仕事を任せてもらえない」「待遇面で差がある」「店長が変わった時に自分のことが伝わっているのか不安」といった声もありました。

しかし大半の方から良かったこととして、「障害を理解してくれた」「自分のことをわかってもらえた」といった内容の回答がありました。

つまりアンケートからは、オープンで働くことのイメージと実態は必ずしも一致しないということが言えます。障害があるからと言って一概に偏見や差別があるのではなく、理解や配慮を受けながら安心して働くことが出来ている方も多いことが分かりました。

以上のことをまとめると以下の図のようになります。



まとめ

簡単ではありますが、今回は「オープン・クローズ」というテーマについて比較、検討をしてみました。

大切なことは、どちらが良いのかということではなく、皆さんが「どのように働きたいのか」ということです。それぞれのメリット・デメリットと自分自身の望む働き方を照らし合わせる際に、本号がその参考になれば幸いです。



最後にアンケートにあった意見を一つ紹介します。

“近年、障害者だけでなく、マイノリティー（少数派）であることを隠さなければならないような社会は差別的で多様性に反しているという認識も広まっている時代であると感じます。（中略）個人的には少しずつでも（違いを）受け入れられるような社会になればもっと楽に生きられると思います。自分も相手のことを理解したいと思います”

※（）内は編集部注釈

きらりとてくてく表紙にある「work, together, anyone」には「誰もが共に働ける社会を」という意味が込められています。障害の有無や性別、国籍に関わらず、共に働ける社会を目指し、人に優しく、豊かな社会になるためには、お互いを尊重し、認め合えるようになることが大切だと考えています。これからもその実現に向けて発行を続けていきたいと思っています。

次号予告

次号は「コミュニケーション」をテーマにする予定です。